

## 『再会! 三重県立美術館のコレクション』展をふりかえって

推理小説や怪奇小説・幻想小説で、美術ないし美術館をモチーフにした作品を時に見かけます。では寡聞ながら、未来を扱ったSFではどの程度あるのでしょうか？過去の記録をふりかえるという形で、博物館や図書館ならいかにも登場しそうです(ウエルズ「タイムマシン」)。その中に歴史資料として、いわゆる美術作品が含まれるということもあるかもしれません。しかし博物館の一変種でありながら、審美的な体験を中核におくものとしての美術館はどうでしょう(諸星大二郎「失樂園」や菅浩江『永遠の森 博物館惑星』)?たとえば音楽に比べても、美術(館)が大きな役割をはたす、未来を舞台にしたSFが少なさそうな気がするの、単なる勉強不足のせいではあるのでしょうか。

三重県立美術館が収蔵してきた作品による『再会!』展は、時代・地域・ジャンル等を大まかな枠としながらも、特定のテーマを浮かびあがらせようとする以上に、できるだけ質的に優れたと目しうる作品と対面する機会を提供することに重点をおいた

展観でした(「質」の語で何を意味するかはさておき)。いわゆる名品展というわけです。コレクションの蓄積としての美術館、これはある意味で、近代西欧に成立した美術館という制度のあり方を、もっとも正統的に踏襲しようとした立場といえるかもしれませんが(「正統的」の語がはらむ政治性はおくとして)。それはまた、過去および現在の歴史が産み落とした所産を、未来へ伝えていくことをその重要な機能としています。

しかし人類や太陽はもとより、ことによればこの宇宙も、永遠の存在ではありません。この宇宙が永久に膨張を続けるとしても、遙かな時間の経過の後には、陽子が崩壊することすら予想されるといいます。そんな遠未来において、美術なり美術館をどんな風に想像することができるのでしょうか。それでもなお、たとえば未来のある時点、人類が滅びた地球に降りたった異星の者という形での鑑賞者と、作品たちが再会するさまを夢想することくらいは許されるかもしれません。(lk)

『再会!』展展示風景

